

## 普遍的知恵への志向

—J. A. コメニウスのパンソフィア—

太 田 光 一

## 新しい知識観

古来から、物事を知ること、知識を獲得すること、そして知恵のある賢明な人間になることは、常に人間の目標、理想であった。そして、何がそもそも知るべき知識であるのか、そのような知識は何のために必要なのか、また知識はどのようにして獲得されるのか、しかもその知識を、単なる断片的な事実の情報ではなく人間に内面化された知恵とするにはどうしたらいいのか、このような問いを人間は常にたて、探究してきた。それは今日も探究すべき教育学の重要課題である。

ものを知ること、知識を獲得することは、古来から人間のみならず独自の働きとされてきた。古代ギリシャ・ローマでは、知恵ある人間、全人的教養を備えた賢者が理想とされた。そしてルネサンス・ヒューマニズムではあらゆる学問の有機的調和が求められた。だがそれは何のためにか。ルネサンスの知識人の代表とされるレオナルド・ダ・ヴィンチは次のように評価されている。

「レオナルドは、いつも個々の問題に興味を奪われ、事実、知識の組織的体系に取り組むことには何の関心も持たなかったし、彼自身の発見を他の者へ伝達し、説明し、証明することについてはまったく意に介していなかった。……（彼の計画は）人間の労苦を軽減し、世界と物質に対する人間の支配力を拡大しようという進歩の精神からというよりも、祝祭、催し、機械仕掛けでもって人を驚かすことといった一時的な目的のために考案されたように思われる。」<sup>1)</sup>

これに対して、知識を体系化し他人へ伝達すること、知識を人間の幸福のために活用すること、といった主張は、近代の哲学者たちに顕著にみられる特徴である。

ギリシャ以来のこれまでの学問の不毛性・非生産性を厳しく批判し、学問の「大革命」を企てたフランシス・ベーコンは、こう述べている。

「最後に我々はあらゆる人に全体として忠告したいと欲する。すなわち、知識の真の目的を考えると、知識を心の楽しみのためとか、争いのためとか、他人を見くくすためとか、利益のためとか、名声のためとか、権力のためとか、その他この種の低いことのためにではなく、人生の福祉と有用のために求めること、それを愛のうちに成しとげ支配することである。」<sup>2)</sup>

個人の卑近な利益のためではなく、人類の幸福に奉仕することが知識の真の目的なのである。またそのような知識は、一部の学者に占有されてはいけぬ。ベーコンはさらにこう述べる。

「我々の諸学を発見するやり方は、知能の鋭さと強さにはあまり多くの余地を残すものではなく、知能や知性をばほとんど平等にしてしまうものなのである。というのは、あたかも直線が引かれ、完全な円が描かれるためには、もし手だけの力で行われる場合には、手の確かさと訓練とに多くが懸っているが、しかし定規やコンパスが使われる場合には、そうしたことはほとんどもしくは全く必要がない、ちょうどそのように我々のやり方も全く同様なのである。」<sup>3)</sup>

このような、新しい性格をおびた知識は万人のものとならねばならないという志向、換言すれば学問の民衆化という要請も、近代特有のものであったといえよう。『方法序説』の冒頭で「良識は

この世のもので最も公平に配分されている」と宣言したデカルトは、『哲学原理』ではさらに詳細にこう述べる。

「私は多くの人の天与の才能を調べてみて、次のことに気がきました、即ち、もしも正しく導かれるならば、いかに未開な人や鈍い人であっても、正当な意見を理解し、進んであらゆる最高の学識を獲得できないほどの人は、ほとんど全くないということです。」<sup>4)</sup>

もちろん、傍観しているだけで学識が身につくわけではなく、新しい方法が必要なのである。それと同時に、方法に導かれて獲得しやすいように、知識の一定の連関性、体系性という条件が必要となる。

デカルトは、知識が統一的な一つの全体として構成されているという確信を持っていた。彼は哲学全体を「一つの樹木のごときもの」にたとえ、「その根は形而上学、幹は自然学、そしてこの幹から出ている枝は、他のあらゆる諸学」であるという<sup>5)</sup>。また、若いときの未完の小品『精神指導の規則』では、学問を一つ一つ別々に切り離して研究することは誤りだと断じ、「普遍的知恵」ないしは「人間理性の第一の根底を含み……他のすべてのものの源泉」となるべき学問が存在すると主張していた<sup>6)</sup>。

ベーコンも学問を区分するに先だっこう述べている。

「知識の区分と区画は、交わって一点だけで接する別々の線のようなものではなく、一本の木の小枝のようなものであり、小枝は幹のところで交わるのであるが、その幹はそこから大枝が腕のようにそこから出て分かれるようになるまではまとまって連続的なかさや量をもつのである。それゆえ、前述の区分に立ち入るまえに、本源の、あるいは最高の哲学としての「第一哲学」の名によって、一つの普遍的な学問をうちたて、それをば、道が分岐していく以前の共通の本道とするのは、適切なことである。」<sup>7)</sup>

知識は人間にとってどうでもよいものではなく人生に必須のものであり、従って万人に共有されねばならない、そのためには、一方で誰にでも知識が獲得されるような方法が必要であるし、他方で知識は獲得されやすくまとまっていなければならない。知識の目的、方法、体系、これらの要請は不可分一体のものである。

以下私は、ここで17世紀のコメニウス (Comenius, Jan Amos Komenský 1592-1670)に即してこれらの問題を考えてみたい。結論を先に述べるならば、コメニウスは、戦乱によって祖国を追われ、世界の平和と祖国の独立を教育によって実現しようと考えたがゆえに、そして自ら子どもの教育に携わり、自己の知的作業を教科書の執筆から始めたがゆえに、以上の課題をいっそう徹底して自覚せざるをえなかったのである。

## 『言語の扉』とパンソフィア

コメニウスは亡命地のポーランドのレシュノで、教育学の処女作とも言える著作を執筆した。1631年の『開かれた言語の扉』である。これはラテン語学習の教科書であった。同時に彼は、教えるための手引き書を執筆した。『教授学』（ボヘミア語で執筆）およびそのラテン語改訂版である『大教授学』である。

『大教授学』より詳細には『あらゆる人にあらゆる事柄を教授する普遍的な技法を提示する大教授学』では、「あらゆる人OMNES」に「あらゆる事OMNIA」を教授する必要性と可能性が強調されている。コメニウスは、「あらゆる人」については特別な留保をつけなかった。地域差、身分差、貧富の差、男女差、知能の差にかかわらず、あらゆる人に教育が必要だと主張する。<sup>8)</sup>

しかし「あらゆる事」には一定の留保が付けられていた。文字通りのあらゆる知識の完全無欠な習得ではなく、重要な事柄の基礎・根拠・目的を学べばよいというのである。

「私たちがなにか、あらゆる人にあらゆる知識・技術の（とりわけ完全無欠な）習得を要求しているとお考えになってはいけません。申すまでもなく、そんなことは本来なんの役にも立たないのですし、また私たち人間の一生の短さを考えれば誰にもできはしないのです。……人間が地上に送られてまいりますのは、ただの観察者であるためではなく、やがて行為者となるためでありますし、したがって、すべての人が、現世と来世とで出会う重要な事柄のすべてについて、その基礎、根拠、目的をはっきりとつかむことを、学んでほしいのであります。」<sup>9)</sup>

それでは具体的には、コメニウスにとって何が「あらゆる事」なのであろうか。とりえず当面の答えは提示されているように思われる。彼の『言語の扉』の内容がそうである。この本は主として生徒のラテン語学習の入門教科書とされ、天体から始まって鉱物・植物・動物などの自然界、人間の肉体的構造、人間の工業技術、様々な職業などの社会生活、教育・学問・宗教、等々の説明が百項目に分けて簡潔に記述されている。それに各国語訳がつけられて大いに普及したのであるが、単なるラテン語学習の教科書ではなかった。そのフルタイトル『開かれた言語の扉 すなわちあらゆる言語とあらゆる知識との苗床』が示すように、人間に必要な「あらゆる知識」が凝縮されている小百科事典のようなものだったのである。

もちろんコメニウスはこれを完成したものとは見ていなかった。その後も何度も改定作業を行い、あるいは対話形式を取り入れたり（『演劇の学校』）、挿絵をほどこしたりした（『世界図絵』）。

コメニウスの『言語の扉』は、ヨーロッパ各地に大きな反響を引き起こしたが、とりわけイギリスのハートリブの注目するところとなった。彼の求めに応じてコメニウスは自分の意図を書き送った。それはハートリブによって1637年に『コメニウスの意図の序幕、開かれた知恵の門すなわち汎知学の苗床』という題を冠して出版された。<sup>10)</sup>

この本の初めてコメニウスは、簡潔で有用で容易な言語教授の方法が発見され出版されたが（コ

メニウスの『言語の扉』を指している(太田注)、それと同じように、あらゆる学問への入口となる、事物そのものへと開かれた扉が必要である、現在「事物の扉、別名学問の門」を仕上げたいという願望を抱いている、ある種の百科全書すなわち汎知学のようなものを作成しようという期待を抱いていると述べた<sup>11)</sup>。

こうして、『言語の扉』の他に、これまでの欠陥をすべて除去した新しい書物が書かれねばならない。その新しい書物をコメニウスは「事物の普遍的認識、つまり汎知学Pansophiaパンソフィア」と呼んだのである<sup>12)</sup>。

パンソフィアの文字通りの語義は、いうまでもなくギリシャ語の「 $\pi\alpha\nu$ ＝すべての」と「 $\sigma\phi\iota\alpha$ ＝知識、知恵」の合成語で「すべての知恵」の意味であり、日本語では「汎知学」または「汎知」と訳されている。<sup>13)</sup>

コメニウス自身は「パンソフィア」という用語を、Peter LaurembergのPansophia sive Paedia philosophica (1633) という著作から触発されたとして述べている。その本の題に引かれ、さっそく読んでみたものの十分に納得いくものではなかった。それでも、自分の計画している著作の題名にこの「汎知学」という用語を借用したのである<sup>14)</sup>。コメニウスが「パンソフィア」という用語を知ったのは恐らくそれが初めてだったのではあるまい。すでに様々な著作にこの題名が付けられていたからである。<sup>15)</sup>

コメニウスはとりあえず「パンソフィア」を「普遍的智恵Universalis Sapientia」「全知Omni-Sapientia」とまったく同義だとしながら、自己の考えの独自性を強調するためにギリシャ語のパンソフィアの方を愛用した。

要するに、まずコメニウスは、「あらゆる事」を教え・学ぶ必要性を主張し、あらゆる知識、普遍的知恵をギリシャ語の響きをもつ「パンソフィア 汎知学」という言葉で表現した。そして固有には、そのような内容が収められる予定の本を『パンソフィア 汎知』と命名したのである。そこで問題なのは、コメニウスがなぜこの用語を採用したのかということよりも、この用語にどういう意味を込めていたのかということであろう。

## パンソフィアの意図

それではその「汎知学」の本はどういう条件を満たさなければならないのか。

コメニウスはこれまでの学問の欠陥を、「I. 不必要なものがあまりに多く混ぜ合わされている、II. 学習が混乱していた、III. 些細なものを過度に追求しすぎていた」と見る<sup>16)</sup>。ここから出てくる結論は、ごくわずかのエッセンスを体系だてて組織することである。彼は「すべてのものが単一の秩序に従って伝達される」ことを希望し、「キリスト者の哲学」むしろ「汎知学」が探求されるべきだという<sup>17)</sup>。彼はこれまでの「百科全書」は木材の堆積に似てはいるが、それにたい

して「汎知学」は、「至る所で自分自身に繋がり合い、至る所で自分自身に活力を与え、至る所で自分自身を成果で満たす普遍性の生ける像」となるはずのものと述べ、そのような「汎知学」の書の特徴を次の5点にまとめている。「普遍的学問の着実な概要、人間の知性の明るい光、真理の正確で確固とした規則、人生の物事の確かで教訓的な記録、神へと向かう祝福されたはしご」<sup>18)</sup>

さらに続いて「汎知学」の書は、「普遍的な教養を入れた単一になっているような貯蔵庫」であり、「そこでは何に対しても不足を感じることは妥当性がなく、もちろん絶えざる、明瞭な、判然とした事物の繋がりに即して、また、自分自身の根や水脈から押し出しているすべての事柄によってですが、それを読むことによって精神の中に一人で知恵が流れ込むようになっている書物」と述べ、その要件として、「簡便」で「大衆的」で「堅実」であることを挙げている<sup>19)</sup>。

そうして「汎知学」の書物を書くために、I. これまでのすべての資産を再確認し、II. 目録を事物と比較し、III. それを新たに普遍的に整えることが必要であり、「汎知学」は「単一の普遍的学問」「すべての学芸に通用する学芸」となろうと重ねて強調する<sup>20)</sup>。

彼は次に「汎知学」ないしは普遍的知恵という呼称の根拠を以下の三点から説明する。第1は、事物の断片ではなく諸事物そのもの、第2に、相異なる学問ではなく単一の学問、第3に、利用の観点、すなわちキリストの特性の一つとなった普遍界という観点からである<sup>21)</sup>。

要するに、「汎知学」の書物は、それをマスターすれば人生に過不足のないような、まことに便利な夢のような書物なのである。しかしこれはコメニウス一人の夢想だったのではなく、ペーコンやデカルトも共有していたことはすでに見たとおりである。

もちろんコメニウスはこの実現が容易であるとは思っていなかった。コメニウス自身も、また周囲の友人も、意図する「汎知学」が単独の力で完成するとは考えなかった。学者の結集した共同の力、学会が必要であると考えられた。コメニウスが自己の任務としたのは、書かれるべき「汎知学」の内容そのものではなく、原理を示すことであった。

ところで私たちにとって興味深いのは、このような「汎知学」は実現困難とは言え、完成した暁には誰にでも容易に獲得されるということである。

彼はこの「汎知学」の書は、「教養ある者にとっても、学校にいる青少年にとっても、すべてのキリスト者の庶民にとっても」成果を挙げられると力説する<sup>22)</sup>

すなわち「言語の扉」はラテン語の入門書であり、ラテン語を必要とする特定の人だけのものだが、事物を学ぶのはあらゆる人に必要であり、だれでもが自国の言語によって、「知恵の門」から入ることが求められているのである。

「人間として生まれた者はすべて、神の栄光と神の祝福に浴するという同じ目標に向けられるべきですし、どんな者でも、男も女も、児童も老人も、貴族も庶民も、職人も農民も、その他の人々も、排除されるべきではないからです。」<sup>23)</sup>

「ラテン語の学習はある人々に特定されたものですが、知恵の願望は人類に共通しています。」<sup>24)</sup>

## あらゆる人のためのパンソフィア

コメニウスは『序幕』の公刊後、自己の意図をさらに鮮明にする必要に迫られ、それを『汎知学の意図の明示』として公表した。彼はの中でアリストテレス以来現代に至るまでの様々な「諸学科の統合」の試みを列挙しつつ、それらはみな不十分だと断定する。そして「汎知学」の書物を「学校の青少年にないしは教養あるものに使用させるというばかりではなく、キリスト者の庶民にも使用させて、すべての者が普くさらに正しくわきまえられることを教われるように」という希望を再び表明し<sup>25)</sup>、自分の目指すものが単なる知恵ではなく「全知」「普遍的知恵」であり、わざわざギリシャ語で「パンソフィア」と命名した根拠をあらためて、主体、対象、方法の3点から指摘する<sup>26)</sup>。

第1に、「汎知学」は全人類のための公的な所有物であり、共同の利益に奉仕せねばならない。どんな卑しい人からも遠ざけられてはならない。これまでの哲学で求められた知恵は、特定の学識ある人のためだけであった。第2に、「汎知学」は、哲学、神学、法学などに分割されたものではなく、全般的な真の認識である。これまでの学問は、あまりに相互に分離していることをコメニウスは『序幕』でも何度も批判していた。第3は、方法の原理の普遍性である。感覚・理性・啓示という三つの原理に基づいて、やさしく、確実に教えられるべきである。

第1の根拠を詳しく紹介しておこう。

「……これまで数世紀にわたって、知恵そのものは誰かある者の、つまりその泉に入ることを許された者の個人財産のように見なされてきました。しかし私たちは、それが人類に共有されるものとして譲渡されたものであり、それを公共の権利や用途のためのものとして請求するのは正当であると主張しているのです。私たちは神の栄光を通して、次のような道が求められかつ見出され、準備されることを祈り懇願しています。すなわち、その道を経て行けば、すべての者に対して普く、最下層の庶民にさえも、すべての者が見・聞き・味わい・触れ・行い・言い・考えているすべての事柄によって、自分の創造主の力・知恵・善の足跡が至る所で刻み付けられるので、その足跡を直観し崇拝することが許されるはずであるという道が、です。その第一目的によって、単なる知恵ではなく、すべての人間に相応しい知恵を私たちが提言しているということです。」<sup>27)</sup>

そして以上を総括してコメニウスは、「あらゆる人が、あらゆる事を、あらゆる面にわたって omnes omnia omnino」教えられる、これこそが「汎知学」と呼ばれる所以であると強調する。また、この「汎知学」は「最善知」「精選知」でもあると称している。

この「あらゆる人が、あらゆる事を、あらゆる面にわたって」というスローガンは、『大教授学』の表題に掲げられた「あらゆる人にあらゆる事を」というスローガンに代わってこれ以後コメニウ

スの思想の中心概念となり、晩年の『汎教育』において全面的に展開されるようになるのだが、三つの標語は不可分一体のものであり、しかも同格に置かれているのではないように私には思われる。

すなわち、第1の「あらゆる人」がなんといっても他を条件づけているのではないか。「汎知学」という用語の根拠の説明のしかたは、『序幕』から『明示』に至る過程で、「あらゆる人」が前面に位置づけられたと私には思われるのである。つまり「あらゆる事」は文字通りの完全無欠な知識ではなく人生に有用な知識であるが、「あらゆる人にとって」有用であるという条件によって限定されている。「汎知学」は単一の体系だてられた学問であるが、それは「あらゆる人」が学ぶのに必要だからである。「汎知学」は「すべての人間に相応しい学問」であり、あえて極言すれば、汎知学を特徴づけているのは、単一の体系化された学問というより、万人の獲得可能性という性格が優先しているのである。コメニウスが錯綜している学問を体系化せんとするのは、単に学問的な関心のみに基づいてるのではなかった。民衆に獲得しやすいような学問の体系化を目指したのである。

コメニウスはイギリス滞在中に『光の道』という著作を書いた（ただし出版は1668年である）。この中で「汎知学」はどのように位置づけられているのだろうか。

『光の道』の第1章では、世界が神の知恵の学校であり、あらゆる人がこの学校で学ぶべきだと主張されている。以下、これまでの世界の学校は無秩序のもとにあったこと、そしてその治療法はいかにあるべきかが論じられるが、さしあたりここで私たちが検討すべきなのは、コメニウスの「汎知学」に関する部分である。

コメニウスは第14章の初めで「普遍的光の道の目的は三つ、すなわちあらゆる事をあらゆる人があらゆる面にわたって教えられることである」と主張し、「あらゆる人」について説明した後、「あらゆる事」の説明の最後に再び「あらゆる人」の問題で念を押す。

「以上が、普遍的光の下で教えられ学ばれるべきあらゆる事です。ところで私たちはあらゆる人がこの最高の光の参与者となるよう勤めるのですが、それは職人、農夫、婦人が書物に専念することではありません。むしろ、あらゆる人に必要なこれらの事柄において誰も無視されないようにということです。」<sup>28)</sup>

「次のように言う人がいるかもしれません（そういう人がいることを私たちは知らないわけではありません）。すべての人が学者になったらどうなるのだ、宗教や国家の事柄に誰もが口をだして混乱を招くのではないかと。答えましょう。国家や宗教の安定が、臣下の無知と隷属に依存している状態は、悲惨に違いない、と。……あらゆる人が学者になることが求められているわけではありません（各人にそのような知能や状態、地位が認められているわけでもなく、その必要もありません）。むしろ、あらゆる人が救済にあたって知恵ある者になってほしいのです。この知恵sapientiaは学識eruditioほどには備えを必要としません。……」<sup>29)</sup>

さらに15章から19章までは普遍的光にとって普遍的書物・普遍的学校・普遍的カレッジ・普遍的

言語という四つの必要物があるとされ、16章で「普遍的書物」について詳述される。この「普遍的書物」は人間が知るべきあらゆる事が凝縮されている書物のことであるが、これがすなわち「汎知学」ではない。これはコメニウスによれば「PANSOHIA汎知学」「汎歴史PANHISTORIA」「汎理論PANDOGMA TIA」の三つから構成される。「汎知学」は「普遍的書物」の一部なのである。それでは「汎知学」と並列させられている他の二つ、「汎歴史」と「汎理論」とは何であろうか。

「汎知学」は人間を賢明にするあらゆる事物の知識の集積、「永遠の真理の核心」であり、「この書物は、ただしく整えられた、神の書物・自然の書物・聖書・魂に内在している観念notioの、秩序正しく記述された写しapographumに他ならない。この書を読み理解する人は誰でも、自分自身・自然の世界・神を同時に読み理解できるような書」である。「汎知学」では事物の一般的な原型idea・観念notioが示されるのにたいして「汎歴史」は個別の事物の個々の行動・偶有性・問題のその起源から現在までの、個別から一般への前進の過程の事例の集積である。これは普遍的知恵を強化し増加させるのに役立つ。「汎理論」は、これまでに提出された様々な理論・学説の概要である。それが真理であるか、誤りであるかにかかわりなく、とにかくあらゆる民族・宗教・哲学の意見が収められる。真理に至る協道・横道・迂回路・迷い道や誤りに導く間違った道などを知っておけば、正しい道を歩む確信が強められ間違いを犯す危険が少なくなるからだ。だがこれはあらゆる人に必要というわけではない。これに携わるのは固有に学者と呼ばれる人だけでよい。適切な索引の作成、学説の脚色なしの概要の作成、そしてあとは図書館に全部の著作を備えていつでも見れるようにしておくことが重要である。

そして、「この書（汎知学）の目的は、学識ある者にするのではなく、知恵ある者にするのでしよう。つまり、人々に自分自身の目的とあらゆる事物の目的を理解させ、その目的の手段とその手段の正しい使用法を理解させ、そして束の間のまたは永遠の幸福の印を見失うことのないようにさせることです。」と述べられている。<sup>30)</sup>

この全部はもちろんコメニウス単独の力では達成不可能であった。そして最終的には、晩年の『総勧告』でこの「汎歴史」「汎理論」という用語は消えてしまうのであるが<sup>31)</sup>、ここでもコメニウスの「汎知学」はあらゆる人に必要だという志向が鮮明に表れているのが窺えよう。

## パンソフィアの構想

コメニウスは一方で「汎知学」がどのような要件を備えていなければならないかという汎知学の理論に取り組むと同時に、独力で「汎知学」の内容そのものを執筆する努力を続けた。その痕跡は、一方で死後出版された『事物の扉』で<sup>32)</sup>、他方で1966年まで公刊されることのなかった『総勧告』<sup>33)</sup>の第三部『汎知』から窺うことができる。

1681年にライデンで出版された『開かれた事物の扉、すなわち第一の知恵』には、「普通には形

而上学と称されている」という指摘が括弧付きで添えられている。もっともコメニウスは、アリストテレス以来の形而上学と自己のものがそのまま同じとは認めていない。ただ、現実存在する個々の事物そのものを論じるのではなく、事物の形を超えてそれを根拠づけている本質を抽象的に論じるという意味で、コメニウスの『事物の扉』は彼にとって形而上学なのである。

実際、この『事物の扉』で扱われているのは、事物の本質、実体と偶然、事物の存続と場所、量と質、事物の運動などである。『言語の扉』が、人間の生活圏に存在する具体的事物・現象を提示し、それが何であるかを理解していくのと比べて、まったく別な構成原理が採用されている。そうすると、コメニウスがこれまで強調していた事物の普遍的・一般的な形態・観念といったものが構想されていたのかが判明になって来る。『言語の扉』が具体的な事物・現象に名前をつけて、すなわち言語の面から理解していくのに比べて、『事物の扉』は、個々の現象を貫いてその底にある抽象的概念を理解させることが目指されているのである。

この点は、『総勧告』の巻末に付けられた未完成の『汎知学事典』の中のPansophiaという項目の説明を読むといっそうはっきりする。

「汎知学とは、普遍的知恵のことである。すなわち、存在しているあらゆるもの知識、あらゆるものが存在しているような方法での、あらゆるものがそのために存在しているその目的と使用のための知識である *notitia scilicet omnium quae sunt, eo modo quo sunt, ad finem et usum ad quem sunt*。

そこで三つのことが必要である。つまり人間が、1. あらゆる事をその本質に従って知ること *Omnia per essentiam sciuntur*。2. 本質をその形態に従って認識すること *per formas suas intelliguntur*。3. 最後に、あらゆる事をその目的に従って使用を明確に示すこと *Omnia denique per finem suum usum sui ostendant clare*。

あらゆる事については、私たちはあらゆる個々の事物ではなく（それは際限がないから）人間が生存中、死後、そして永遠において出会うもののうちで、知らないでいて不利益になるものは何もないように、あらゆる種類を認識することである。

事物の方法については、私たちはここでも無限に多様な個々の形態ではなく、一般的な原型 *generales Ideas*を認識するのである。その原型に従って、あらゆる事が整えられ、それに従ってあらゆる事が生じ、作用し、判断されねばならない。

事物の目的については、部分的な事物のあれこれの部分的目標ではなく（それは無限である。無限なことの知識は、私たち有限な人間には与えられていない）、普遍の一般的な目標設定を認識するのである。なぜなら、すべての創造されたものは、神の名声を明らかにし、人間に最高善への愛を喚起し、その善への努力を軽減し善の楽しみを増すことができるからである。」<sup>34)</sup>

以上で明らかのように、「汎知学」が扱うのは、個々の事物そのものの世界ではなく、私たちに

分かりやすい表現を使えば、一般的・抽象的概念の世界である。そして抽象化の指標は、事物を人間の目的にしたがってどのように使用するかという観点、換言すれば知識の人間にとっての有用性という視点なのである。

さてそれでは、『総勸告』の第三部『汎知』を概観しておこう。

全体の序文では、「パンソフィア」は「汎連関PANTAXIAつまり事物の普遍的秩序Rerum Universalis Coordinatio」とも表現され、「汎連関」という用語が新たに登場している。「汎知学」が事物の統一的な単一の連関をなしていることを強調してつけられたのであろう（だが、本文ではこの「汎連関」という表現は出て来ない）。<sup>35)</sup>

第三部の『汎知』には、二つの表題、二つの序文がついている。第1の表題は、「人類に共通の書物 汎知 すなわち普遍的知恵」と題されて「汎知学とは、……あらゆる人OMNESが、善と悪のあらゆる事OMNIAをはっきりと見ることができ、あらゆる面でOMNINO誤りのないように、善に到達し悪を避け逃れることができるように基礎づけられた知恵」とであると、ここでも例の三つのスローガン「OMNES OMNIA OMNINO」が述べられている。第2の表題は「人事の改善についての総勸告 第三部 汎知」という題で、「汎知学の書物をどのように作るかについての勸告」が続く。

第1の序文をもう少し検討しておこう。ここでコメニウスは、『汎知』という新しい名前の書物は、「あらゆる人が一冊の本の中に、必要不可欠で完全なあらゆる事が見出せる」ような書物であると述べる。この本は、無学の人にも理解可能である。そのために次の三つの原理が採用される。1、一冊の本の少ないページに収められている。2、哲学的な堅い文体ではなく、人類の大部分を占めている普通の民衆が分かるような言葉で書かれる。3、叙述は、3人の会話（善を求める人、調べる人、決定する人）の形式で書かれる。そしてこの書物は、世界中のあらゆる国民、すでに教養があり洗練されている人々にも、これまで無教養で粗野だった人にも資するし、どの身分、宗教に属していても役に立つことが強調されている。<sup>36)</sup>

この第1の原理は、これまでもコメニウスが、知恵を精選する必要性や、簡便な本の必要性を説いていたことから必然的に導きだされる原理ではあるが、まことに不可能な願望であろう。実際、このあとに続く『汎知』の内容は、チェコ・アカデミー版でも1000ページ以上にもわたる膨大なものであり、しかも未完なのである。第3の対話体という原理は、すでにサロスパタークで演劇形式の、つまり対話で学習を行う形式で実践済みであり、実際この『汎知』でも、3人の対話体で叙述を進めようと試みられているが、ほんの最初の部分に採用されているだけであり、この点でも未完成である。

このように、この原理はコメニウスにおいて貫徹しているとは言い難いが、その志向はきわめて重要だといえよう。そこに貫かれているのは、なんとかしてあらゆる人が知恵ある人になって欲しいという熱望である。

『明示』で「汎知学」の用語の根拠として提示されたomnes omnia omninoという3つの単語は、その後の著作で彼が「汎知学」が何であるかを説明するときに必ず登場するスローガンとなった。「汎知学」は、現世と来世に必要な普遍的知恵であるが、それは簡便なものであり、だれにでも理解可能なようにまとめられた書物である。「必要なもの」と同時に、理解が可能なもの、そして容易なものでなければならない。逆に言えば、不必要なもの、不可能なもの、困難なものはそこから除去しなければならないのである。なぜなら、だれでもが持って生まれた能力を駆使して短い期間に習得することができなければ、それは「汎知学」の名に値しないからである。このような思想を、コメニウスは次第に強めていったと思われる。

『汎知』に続く第四部の『汎教育』でもこの3つのスローガンは貫徹されている。

「汎知学」はあらゆる人が分かる内容である。他方、教授学は、あらゆる人に分かるように教える方法である。すなわち、「教授学」は「汎知学」が精選した教育内容を、誰にも分かるように教える技術であり、「汎知学」は、「教授学」に則って教えれば誰もが分かるように構成された知識、さらに言えば、すべての人に教えるのが不可能なら削除することを想定した知識内容のことである。両者の関連をこのように考えることはできないだろうか。コメニウスがかくも「あらゆる人に、あらゆる事を、あらゆる面にわたって」教育することを重視したのは、「人間に関する事柄の普遍的改革=総勧告」にとって必要であったからなのである。

## パンソフィアと百科全書

「パンソフィア」は普遍的知恵、統一的な単一の学問体系であった。コメニウスはそのような知恵を誰にも読めるように一冊の書物に収めようとした。これは今日から見ればまことに不可能な企て、まさに「賢者の石」を発見せんとする錬金術師にも似た夢想のように思われる。

あらゆる知識を体系的に編集した書物は「百科全書（事典・辞典）」と称されている。だが今日ではこれはアルファベット順に並べられた、膨大な分量の書物を表す言葉として理解されている。その「百科全書」の原型を作ったのは、何と言ってもフランス百科全書である。フランス百科全書は、「学問・技術・工芸の合理的（体系的）辞典」と名づけられ、「人間知識の順序と連関」を明示することを目的とすると最初に宣言されている。彼らにとっても、知識は個々バラバラなものではなく「一本の系統樹」にまとめられるはずのものであった。そして、「厳密さと正しい論理的順序とをもってすれば、ほとんどいかなる学問や技術でも、知能のもっとも劣った精神にさえ教えることができるだろう。なぜなら、どんな学問ないし技術にしても、その諸命題ないし諸規則を単純な諸概念に還元し、それらをこの単純な諸概念のつながりとして、きわめて直接的でその鎖のどこにも切れ目のない順序に配列できないものは、ほとんどないからである」と明言されているのである<sup>37)</sup>。そして彼らはこのような「人間知識の系統図」を、ペーコンを参照しながら掲げた。

このように、18世紀の啓蒙思想家たちによっても、知識が体系化されること、個々の知識は単純な概念に還元できること、そして最も抽象的な概念の方が大多数の人にとって近寄りやすい、という確信が共有されているのである<sup>38)</sup>。

だが、実際にこの辞典を執筆するに当たっては、系統的・体系的配列ではなく、アルファベット順に記述する方針が採用された。この方が読者にとって都合がよいし、しかも共同執筆に際しても便利だからである。

だがコメニウスにとっては、やはり知識を獲得するにあたって、なんらかの系統、体系に従って順序だてて学ぶことが重視された。それはひとえに、コメニウスが、まだ知識を獲得していない子どもの教育という観点から、そして学問の素養のない民衆への知識の普及という観点から発想してきたからだと考えられるのである。今日でも、子どもにどのような「基礎的教育内容＝世界を構成している基本法則・基本概念」をどう精選し、どのような順序で教えるべきか、そのために教育内容をなう「教材＝具体的事物」をどう提示していくべきかは、教育学の重要な課題である。

## 引用文献一覧

ここで言及したコメニウスの著作は、プラハのチェコスロバキア科学アカデミーから発行されている以下の出版物に収録されているものを使用した。

- ・ OPERA DIDACTICA OMNIA (1657, reprint 1957)
- ・ DE RERUM HUMANARUM EMENDATIONE CONSULTATIO CATHOLICA (1966)
- ・ OPERA OMNIA Jan Amos Komenský / DÍLO JANA AMOSE KOMENSKÉHO

引用に際しては、ページ数ではなく章・節の番号を示した。なお、翻訳がある場合にはそれを\*印で示した。しかし参照した場合も、訳語は必ずしもそれを踏襲していない。

- 『言語の扉』 JANUA LINGUARUM RESERATA. SIVE SEMINARIUM LINGUARUM ET SCIENTIARUM OMNIUM. (1631)
- 『大教授学』 Didactica Magna.  
\*鈴木秀勇訳『大教授学』(明治図書)
- 『序幕』 Conatuum Comenianorum Praeludia: Porta Sapientiae Reserata, sive Pansophiae Seminarium ex bibliotheca S.H. Oxford, 1637.
- 『汎知学の先駆』 Reverendissimi et clarissimi viri J.A. Comenii Pansophiae Prodromus. (1639) (上記『序幕』の改定版)  
\*A Reformation of Schooles, designed in two excellent Treaties(London, 1642, reprint 1969).  
\*Herbert Hornstein: Johann Amos Comenius, Vorspiele. (Düsseldorf, 1963)  
\*藤田輝夫訳『汎知学の先駆』(私家版)
- 『明示』 Conatuum pansophicorum dilucidatio in gratiam censorum facta. (1639)  
\*藤田輝夫訳『汎知学の試みの説明』(私家版)
- 『汎知学の予知』 Praecognita. In Januam Rerum sive Pansophiae Seminarium I. Introitus. Pansophiae Christianae Liber III.
- 『事物の扉』 JANUA RERUM reserata, sive Universalis Sapientiae SEMINARIUM, vulgo Philosophia prima, et METAPHYSICA dicta. Authore J.A. Comenio. Anno 1643.
- 『光の道』 Via lucis, Vestigata & vestiganda. (1661)  
\*E. T. Campagnac, THE WAY OF LIGHT By John Amos Comenius (Liverpool, 1938).
- 『事物の扉』 JANUA RERUM RESERATA hoc est SAPIENTIA PRIMA (1681, reprint 1968, München).  
\*Erwin Schadel, Johann Amos Comenius Pforte der Dinge (Hamburg, 1989).  
\*藤田輝夫訳『事物の扉』(私家版)

- 『総勸告』序文 *De rerum humanarum emendatione consultatio catholica:Europae Lumina.*  
\*H. Schönebaum, J.A. Comenius, *Ausgewählte Schriften zur Reform in Wissenschaft, Religion und Politik* (Leipzig, 1924).
- 『総勸告』第三部『汎知』 PANSOPHIA.  
\*Franz Hofmann, Jan Amos Komenský: *Allgemeine Beratung über die Verbesserung der menschlichen Dinge* (Berlin, 1970). (ただし抄訳)
- 『総勸告』第四部『汎教育』 PAMPAEDIA.  
\*Johann Amos Comenius, *PAMPAEDIA Lateinischer Text und deutsche Übersetzung Nach der Handschrift herausgegeben von Dmitrij Tschizewskij in Gemeinschaft mit Heinrich Geissler und Klaus Schaller* (Heidelberg, 1960).  
\*A. M. O. Dobbie, *Comenius's Pampaedia or Universal Education* (Dover, 1986).
- 『汎知学事典』 LEXICON REALE PANSOPHICUM.  
\*Hofmann, op. cit. (抄訳)

注

- 1) パオロ・ロッシ著、伊藤和行訳『哲学者と機械』学術書房、1989、P. 50。
- 2) ベーコン『ノウム・オルガナム』桂寿一訳、岩波文庫、P. 32。
- 3) 同上、P. 100。
- 4) デカルト『哲学原理』桂寿一訳、岩波文庫、P. 22。
- 5) 同上、P. 24。
- 6) デカルト『精神指導の規則』野田又夫訳、岩波文庫、P. 9、P. 26。
- 7) ベーコン『学問の進歩』服部・多田訳、岩波文庫、P. 152。

もっとも、学問の体系化・系統化という要請、またその基礎にある形而上学や第一哲学の必要性は、彼らに特有なものではない。これについては、パオロ・ロッシ著、清瀬卓訳『普遍の鍵』（国書刊行会、1984）が興味深い。ただし、中世以来のこのような伝統には、常に錬金術風の神秘的な色彩がほどこされている点で、近代の知識観と決定的に相違していると私には思われる。

- 8) ただし、ここではキリスト教徒という限定がついている。なおこれについては拙稿「あらゆる人あらゆる事を」『高知大学教育学部研究報告第1部第34号』（1982）を参照。
- 9) 『大教授学』第10章1節。
- 10) この本は1639年に『汎知学の先駆』と題を改めて再版された。なお、この間の経緯については、拙稿「コメニウスの教育思想の発展とイギリス訪問」『日本の教育史学』第31号（1988）参照。
- 11) 『序幕』6節、序。

12) 同上、7節。

13) コメニウスのパンソフィアを、戦前の岩波『教育学辞典』（1939）は「汎智主義」、梅根悟は「汎知体系」と訳した。またまれに「汎智論」「万有知」などと訳されることもあるが、現在では「汎知学」という訳語がほぼ定着しているようである。

14) 『明示』5節

15) 「パンソフィア」という言葉は、薔薇十字団関係の文献にしばしば登場する用語だった。ベージェマンの指摘によれば、「パンソフィア」という言葉は、薔薇十字団関係の文献の表題や目次にしばしば登場する言葉であり、しかも「汎知学者」という言葉と「薔薇十字団員」とはかなり密接な関係が想定されていたと示唆している（W. Begemann, Zum Gebrauche des Wortes "Pansophia" vor Comenius. Monatshefte der Comenius-Gesellschaft, Band 5, Heft 7u. 8, 1896）。またイエイツは、「パンソフィア」という言葉は、「フランチェスコ・パトリッツィというプラトン＝ヘルメス哲学者によってルネサンス期にはじめて用いられ……コメニウスやパンソフィアが、現在われわれの理解している薔薇十字運動から直接由来したものであるとみなすことができる」と述べている（フランセス・イエイツ著、山下知夫訳『薔薇十字の覚醒』工作舎、1986、p. 242）。なおパトリッツィとコメニウスの関連については、チェルベンカの研究がある（J. Cervenka, Die Panaugia (Die Vergleichung der zweigleichamigen Schriften von Patrizzi und Comenius), Acta Comeniana XXI/2, Praha, 1962）。

パンソフィアの系譜については、ポイケルトの研究がある（Will-Erich Peuckert, PANSOPHIE Ein Versuch zur Geschichte der weissen und schwarzen Magie, Berlin, 1929, 1956）。

これらの系譜については興味深いテーマではあるが、今回は論じない。

16) 『序幕』18節～21節。

17) 同上29節。

18) 同上39節。

19) 同上41節。

20) 同上51節、53節。

21) 同上111節。

22) 同上111節。

23) 同上122節。

24) 同上124節。

25) 『明示』3節。

26) 同上10節～18節。

27) 同上11節。

- 28) 『光の道』第14章16節。
- 29) 同上17節。
- 30) 同上16章。なお、当時のhistoriaという語は、今日のような編年体の記述を意味せず、例えばベーコンにおいてもロックにおいても、事実の集積といった意味で使われており、従って堀内守氏は「汎記録」と訳しているのだが、ここではあえて直訳しておく。
- 31) 「汎歴史」と「汎理論」の名称はコメニウスがイギリス到着直後に執筆した草稿『真理と平和』の中でも言及されていたものである。チャプコヴァーの指摘によれば、コメニウスはこのような三種の書物から成る構想をイギリスの友人とりわけヒュプナーとの文通での意見交換を通して、1638年頃から構想していた。そしてその後1646年頃にイギリスに送った手紙ではこれらの概念は次のように放棄されようとしている。まず、普遍的歴史の縮図は『言語の扉』の形で記述される。また固有の「汎知学」の入門として『事物の扉』が作られねばならない。「汎理論」は様々な著者の対話の形で書かれた『認識の扉』で代用される、云々。(The Idea of Panhistoria in the Development of Comenius' Work Toward Consultatio, Acta Comeniana 2 (XXVI), Praha, 1970. The Educational Plans of J. A. Comenius in 1646: from a diary sent to English colleagues, History of Education VOL. 7, NO. 2. 1978.)
- 32) すでに述べたように、「事物の扉」という題は『言語の扉』執筆直後に構想された。そして、事物そのものの普遍的知恵である「汎知学」の入門書として何度か執筆されたようである。ターンプルはハートリブ文書の中から『予知、事物の扉すなわち汎知学の苗床』『開かれた事物の扉すなわち普遍的知恵の苗床』といった断片を発見している(G. H. Turnbull, Jana Amosa Komeniského Dva Spisy Vševedně, Praha, 1951)。
- 33) 『総勸告』の出版の事情については、拙稿「コメニウスの『総勸告』研究ノート(その1)」『高知大学教育学部研究報告第1部第39号』(1987)を参照。
- 34) 『汎知学辞典』
- 35) 『総勸告』序文8節。
- 36) 『汎知』序文4節～14節。  
コメニウスが『総勸告』の『汎知』で具体的に書いている内容については次稿で詳しくふれることにしたいが、要するに、個々の事物・現象の記述ではなく、事物を構成している本質的な要素に即して説明が展開される。まず人間の「知る、欲する、できる」という働きが分析され、つぎに「原型、理念の世界Mundus idealis seu archetypus」が論じられ、その後「自然界」「技術の世界」等々が説明されていくのである。
- 37) ディドロ、ダランベール編、桑原武夫訳編『百科全書』岩波文庫、P. 48。
- 38) 同上、P. 42。

